

日本の美意識でリフレームする

登壇者：武蔵野美術大学「日本の発想研究会」

チョウ・シウン、藤田彩月、横山陽子、酒井章、山崎和彦（武蔵野美術大学教授）

日時：2021年3月19日（金）19:00～21:00

会場：オンライン開催（Zoom）

■イントロダクション

酒井：本日は、日本の美意識とクリエイティブ発想を体験するワークショップにご参加いただき、ありがとうございます。今回は、「日本の発想研究会」の皆さんにファシリテーションをお願いしております。「日本の発想研究会」は、武蔵野美術大学大学院のクリエイティブリーダーシップコースのメンバーによってつくられました。デザイン思考が広がりを見せる中、その多くが海外の事例から学ぶという風潮になっておりますけども、私たちの足元、日本の伝統的なデザインやアートを改めて見つめ直すことで未来の変化を掴んでいきたいという思いから発足した研究会となります。

自己紹介が遅れました、私は本日の全体進行を務めます、青山学院大学学習コミュニティデザイン研究所の酒井と申します。武蔵野美術大学の「日本の発想研究会」のメンバーとして、ファシリテーターも務めさせていただきます。よろしく願いいたします。

本日の流れとしましては、アイスブレイクの後、我々研究会メンバーから、クリエイティブ発想と日本の美意識についてインスピレーショントークをいたします。その後は、実際に皆さんに手を動かして造形ワークをしていただきます。最後に、つくったものをご紹介いただきながら、日本の美意識とは何か、あるいはクリエイティブ発想とは何かということについて、対話をしていきたいと思っております。

■アイスブレイク～花を思い浮かべて、スケッチをする

酒井：では、アイスブレイクからはじめましょう。皆さん、お手元に紙や筆記用具等をご用意いただいておりますでしょうか。用意ができましたら、それぞれご自分の好きな花を思い浮かべて、スケッチをしてみてください。また、その花にはどのような思い出がありますでしょうか。思いをはせながら、スケッチをしていただければと思います。

（個人ワーク）

「好きな花」を思い浮かべてスケッチをしてみてください。

（その花には、どのような思い出がありますか？）

酒井：お疲れ様でした。ありがとうございました。スケッチは久しぶりだったという方、いらっしゃいますか。ああ、いらっしゃいますね。上手い下手ということではありませんので。どうもありがとうございました。

■インスピレーショントーク～研究会メンバーによるショートプレゼンテーション

酒井：それでは、研究会メンバーのインスピレーショントークに入ります。クリエイティブ発想あるいは日本の美意識とは何かといったところを、メンバーそれぞれにショートプレゼンテーションをしてまいります。一口にクリエイティブ発想あるいは日本の美意識といっても、メンバー一人ひとり、思いは違います。いろいろな考えがあるんだなということを感じていただきながら、この後の造形のヒントにさせていただければと思っております。それでは、よろしくお願いいたします。

【私が考える“日本の美意識”】—藤田彩月

藤田：私、藤田彩月と申します。武蔵野美術大学大学院の2年生です。earthly creative lab.で地球が喜ぶ暮らしを、日本の発想研究会で日本の美意識に関して研究しながら、それを実際の社会に還元するようなことをしております。

「私が考える“日本の美意識”」ということで、最初に一首、ご紹介したいと思います。「見わたせば 花も紅葉もなかりけり 浦の苫屋の 秋の夕暮れ」。藤原定家によるものですが、意味としては「見渡してみれば、春の美しい花も秋の紅葉もここにはないことよ。海辺の苫ぶきの粗末な小屋のあたりの秋の夕暮れよ」となります。上の句は花や紅葉の華やかさ、下の句では秋の寂しさというようなものを、対比構造を使って表現しています。藤原定家は日本最初の近代詩人といわれる方ですけれども、今日はそんな方の日本の美意識もちょっと借りながら、お話を進めていきます。

日本人ならではの美意識といいますと、私は「自然観」と「神道ism」があるのかなと思っています。特に、日本という島国は、四季がはっきりしています。そんな環境において、日本人は感情を花や自然に見立ててきました。生け花もそうですし、『万葉集』『古今和歌集』の和歌などもそうです。

そもそもこの自然観というのは、神道ismというところにも繋がってきます。季節の変化に命の移ろいを感じたり、常に緑を絶やさない常緑樹に意味を見出して、神の依り代としたり。八百万の神に対して敬意を払いながら生きていくというような、そういう神道ism的なところもあるのが日本の美意識なのではないかなと捉えています。

私は日本の美意識のひとつとして、「わび・さび」を挙げたいと思います。漢字では「侘・寂」と書きまして、一般的には「質素で静かなもの」を指します。本来は「侘」と「寂」は別の概念だったんですけども、禅の影響が入ることで「侘・寂」となり、悟りを得るために理解すべき重要なものというふうにされました。

なぜ今回、「侘・寂」をご紹介したかという、いろいろなものがコンビニエントに溢れているなかで、今一度「足るを知る」ということを考えたいという思いがあって、「侘・寂」に通じるものを感じたというのがあります。

もう少しだけ解説しますと、直感的な理解として「侘・寂」をベン図で表すと、侘の円と寂の円の重なる部分が「侘・寂」であるという感覚があります。なんとも言葉では言い表しにくい感覚ではあるのですが、派手→いき→渋い→侘・寂→地味というような並びに位置するのではないかなとも思っています。私が敬愛するオノヨーコさんは、「SHIBUMI、SABI、WABIは、それぞれ内面的にも外面的にもけばけばしくない美を表現する言葉です」

と表現されています。

アイスブレイクで皆さんにも花を描いていただきましたが、私がサッと描いたのは「椿」です。椿は、色も華やかで美しいなと思うんですけども、咲いている場所は地味な場所だったりします。花言葉も「控えめな素晴らしさ」「気取らない優美さ」なのだそうです。そんな椿に「侘・寂」のような言葉では表しにくい、美しいのだけれどもどことなく寂しいような、そんな日本の美意識を感じました。以上となります。ありがとうございました。

【外国人から見た日本文化】一チョウ・シウン

シウン：私は中国から来た、留学生のチョウ・シウンです。私は日本人でも、日本文化を研究する専門家でもなくて、日本文化という大きなテーマを話す立場にないと思いますから、今回は主観的な感触とか、自ら体験したことから日本文化について話したいと思っています。

私たちが外国、他の国を見るときは必ず、ステレオタイプというような固定化された印象に影響されます。日本のステレオタイプな印象といえば、桜、神社、着物……そういう女性らしくて柔らかで、明るいという印象です。これは多分、日本の戦後の宣伝戦略が関わっていると思います。2014年のアメリカのアニメ映画『ベイマックス』に日本の街を描写したシーンがいくつもあるのですが、まさに、さきほど私がお話ししたステレオタイプな印象が描かれています。

日本は、そういう体表的な要素を抽出して宣伝することがすごく上手い。目に見える要素を繰り返し強調することによって、世界中に日本の文化を広げていますが、逆に言うと、目に見えない、内面的なものが認識されていないという、マイナス面もあると思っています。

内面的なものを認識されないというのは日本だけではなくて、東方アジアの国全体の課題だと思っています。私たちは英語を勉強し、英語圏のテレビやドラマを見ることでその文化に慣れ親しんでいますが、逆はそれほどでもありません。ですから、日本を含むアジアの国の精神的なものは認識されていない。それがすごく残念なことだと思っています。また映画の例を上げると、日本のアニメ『攻殻機動隊』のハリウッド実写版を見たときにも、体表的な要素はちゃんと表現されているのですが、何かすごく空っぽな感じがして、精神的、内在的なものが薄いという印象を受けました。

自分の研究の仮説では、日本文化を海外に広げるときのステップとして、「全体的な体験」→「見えるものの体験」→「見えないものの体験」→「主客が変わる体験」という4階層に分けて展開するという提案をしました。今後は、目に見えない、精神的な誇れるものを考え出して、リフレーミングし、アピールしていくのが課題なのではないかと考えています。

私は日本に来る前、礼儀正しい、おもてなしが素晴らしいというような情報を得ていました。なので、日本に来たら、ユーザーとして最高のおもてなしをしてもらえんと思っていました。でも、実際に、おもてなしを体験すると、息苦しく思う場面もありました。例えば、洋服を買おうと店に入ると、店員が必ず声をかけてきます。誰でも自由に服を試して買うという、アメリカのロジックに慣れていると、息苦しさを感ずります。

中国人の友人が茶道体験をしたときも、そういう息苦しさはあったようです。ただ、もてなす側とユーザーが対

等である「主客一体」というような考え方、文化を教えることで初めて面白いと思ってくれる人もいました。アメリカのような主と客が分離したサービス視点を持つ世界に、日本のおもてなしの考え方もあるよねとアピールすることは意味があると思っています。

私の研究の中でも、主客が変わる体験によって、日本のおもてなしの心を体験するという提案をしていますし、自身でも中国などでアピールしていけたらと思っています。発表はこれで終わりです。ご清聴ありがとうございます。

【SPIRIT OF JAPAN 私にとってクリエイティブ発想 日本の美意識とは】一横山陽子

横山：横山陽子です。よろしくお願いいたします。私は、「五感のデザイン研究所」というところで、国内外での日本美や文化に関わるプロジェクトに携わってまいりました。今日は、私にとってのクリエイティブ発想、日本の美意識とはという観点で、少しですがお話させていただきます。

まず日本の伝統のひとつとして建築文化がありますけれども、私はずっと、釘を使わずに木材同士を組み合わせる「建築継手」の研究をしてきました。伝統を英語にしますと「Tradition」ですが、この中には「Trade」が含まれています。建築継手では、柱が腐ると、腐った下だけを交換します。植物でいいますと、花の咲く木に接ぎ木をするというような発想になるのではないかと思います。

木材の凸凹部を組み合わせる継手は、片方を男木（おぎ）、もう片方を女木（めぎ）と呼ぶのですが、文学部出身の私には、この男木女木が人間関係のように見えました。そこで、継手を男と女の微妙な関係性を表現するアートとして展示したのが、「Joinery 男木のココロ女木のキモチ アート展」です。グラフィックでは、男と女の多様なコミュニケーションを漢字アートとしても表現しました。また、テーブルの上に花を飾るように、継手を配したテーブルをデザインしたこともあります。建築継手のプロダクトが国立民族学博物館のコレクションとなった時には、それを記念して、「点天展・・・凸凹ワークショップ」を開催しました。

また、建築継手のフレームから他領域へのリフレームも積極的に行っています。継手の形を食材にデザインしたり、継手柄の着物や、継手花入れなどをつくったり。蝶の羽のような形の「契（ちぎり）」のデザインを活かした箱や洋服なども制作。建築の領域を超えて継手のデザインをさまざまな形で活用しています。

伝統に注目しながらそれを今に生かしていく、「振り返れば未来のワクワク」ということで、皆さんもクリエイティブ発想や日本の美意識を意識しながら、今日のワークショップを最後までお楽しみください。ありがとうございました。

【「日本の発想」とは何でしょう？】一酒井章

私が日本を感じた原体験は、1970年の万博です。世界中のさまざまな国のコンテンツに囲まれることで、初めて相対的に、日本とは何かを考える機会となりました。その後、仕事の関係で2004年から7年間シンガポールに駐在し、日本の外から、改めて日本という国の良さや課題を客観的に見つめなおすこととなります。一年中、高温多湿な国にいたことで、「四季は日本ならではの良さだな。日本ならではの感性を育む要素なんだな」というこ

とを実体験しました。

四季と言いますが、季節を24に分ける二十四節気というものもあります。春夏秋冬の間にもさまざまなグラデーションがあって、今も冬から春になるグラデーションの中にいるというように、皆さん自身も感じているんじゃないかなと思います。そういう中で、日本人ならではの美意識をひとつ挙げるとすれば、私はこのようなグラデーション、「余白を感じる力」ではないかなと思っています。

そのひとつの代表例として、長谷川等伯が描いた「松林図屏風」があります。屏風に松が描かれていますが、非常に大きな余白があります。意識的に余白をつくるということが、欧米絵画の伝統にはなく、逆に日本から学んだという歴史があります。

では、少し目を閉じて、これから詠む歌の風景を想像してみてください。「田子の浦ゆ うち出でてみれば 真白にぞ 富士の高嶺に 雪は降りける」。万葉集の歌ですが、どのような風景を思い浮かべられたのでしょうか。田子の浦の向こうに富士があり、その向こうに空が広がるというような立体的な風景を思い浮かべたのではないのでしょうか。言葉からイメージする風景も日本人ならではのと思いますし、五七五の調べもまた、日本人に含まれた感性なのではないかと思っています。

私がスケッチした花はというと、朝顔です。千利休が豊臣秀吉を茶室に呼んだときに、一面に咲く朝顔をすべて切り落とし、一輪だけを茶室に飾ったという逸話があります。一輪の朝顔からいろいろなことを想像させるのも、日本の美意識なのではないかと思って、一輪の朝顔を描きました。華道には、「花は生けたら人になる」という言葉もあります。自然の中にある人間という考えも、日本人ならではの美意識なのではないかと思っています。

ただ、地球温暖化によって、日本の季節ののりしろがなくなってきていますし、特に今は新型コロナの影響で、余白のあるコミュニケーションが減ってきているようにも思います。こうしたことは日本人の感性にも影響を及ぼしていくんじゃないかなというふうに感じています。だからこそ、グラデーションを感じる力、余白を感じる力は、ますます我々自身が意識していく必要があるのではないのでしょうか。

【Reframe Workshop by Japan Beauty】一山崎和彦（武蔵野美術大学教授）

山崎：これ、栗きんとんです。僕は美味しくて好きなんですけど、ただ食べ物であるということだけじゃなくて、金運を願う正月料理でもあります。こちらは東福寺方丈庭園です。僕の大好きな庭園のひとつですが、この四角い石で仕切った市松模様、いわゆる幾何的なものですよね。自然と幾何という組み合わせが、この庭園の面白さ、美しさを表していると思います。同じように、桂離宮にもいろいろな美しさがあります。壁や屋根といった建物の素材や形状はもちろんですが、障子の影もまた桂離宮の美しさです。

「さまざまの事おもひ出す桜かな」という、松尾芭蕉の句があります。もっと詳しく文章を書いた方が伝わるはずだと思うんですけど、あえて短い文章にすることで妄想を掻き立てる。これも日本の美しさのひとつだと思うんですね。それから、僕が手掛けたノート PC「ThinkPad」のデザインも、松花堂弁当の美しさをコンピューターの機械に表せないかと考えたものです。閉じているときは非常にシンプルで、開けたときの驚くほどのゴージャスさ、ということですね。

フレーミングは、日常的な観点で意味や状況をとらえることですが、リフレーミングをする、新たな観点で意味

や状況をとらえるってことが、非常に日本文化の特徴じゃないかなと思います。

甘くておいしい栗きんとんは、豊かさを願うもの。自然が美しい日本庭園は、自然と幾何的な形の組み合わせが美しい。豪華な素材が美しい桂離宮は、影が美しい……そんなふうですね、普通は「これがいいよね」って思うことに対して、「いやいやいやいや、こんな見方もあるんじゃない？」ということ、僕らに気付かせてくれるってことが日本文化にはあるんじゃないかなというふうに思います。

リフレーミングとは、「これまでと異なる視点で、意味や状況を捉えたり、発想する」こと。そんなふうな今日のメンバーの話もまとめることができるんじゃないかなと思っています。皆さんの日常のささいなことに、新たな“意味”を捉えてみる。例えば、花をペットにしてみるとか、花を会社の上司と考えるとか（笑）。それから、日常のささいなことに、新たな“状況”を捉えてみる。例えば、花を頭につけてみるとか、花をパソコンに飾るとか。

リフレーミングということで、これまでと異なる視点で意味や状況を捉えて発想することが、ひとつの日本の美意識から見ることができるんじゃないか。それをぜひ、活用していただけるといいのではないかとことです。簡単ですけど、僕の話は以上になります。ありがとうございました。

■造形ワーク~アルミホイルで「あなただけの花」をつくる

酒井：研究会メンバーのトークから、5つの視点を提供してまいりました。ここからは、皆さんご自身に、実際にリフレーミングをしながら、造形にチャレンジしていただきたいと思います。

アルミホイルをご準備いただいていると思うんですけども、描いていただいたスケッチをもとに、皆さんだけの立体の花をつくっていただけますでしょうか。もしお手元にアルミホイルがない場合は、紙でつくっていただいても結構です。他人と比べて上手い下手ということはありませんので、純粹に造形していただくことを楽しんでいただけたらいいかなと思っています。20分間時間を取りますので、ご自身のやり方で作ってください。よろしいでしょうか。では、お願いいたします。

藤田：少しだけ補足をしますと、アルミホイルを目の前にして、感じるままに花を形づくっていただくことでもいいと思います。ただ、どういうふうにつくったらいいか分からなくなったときには、リフレーミングを試してみてください。先ほど描いたスケッチに新たな意味を見つけるとか、日常生活の状況に取り入れてみるというようになちょっと違う視点で考えてみると、何かヒントになるかなと思います。

(造形ワーク)

描いたスケッチをもとにアルミホイルで、立体の「あなただけの花」をつくってください

酒井：はい、お疲れ様でした。皆さん、いかがだったでしょうか。ではここから5分ほどで、つくった花をじっくり眺めていただいて、花にタイトルをつけてみてください。ちょっと余裕のある方はですね、俳句とか川柳に試みていただいてもいいかもしれません。それでは、よろしく願いいたします。

(造形ワーク)

つくった「あなただけの花」に「タイトル」をつけてみてください

(または「俳句・川柳」にしても…)

■グループ対話~どのような気持ちでつくりましたか？

酒井：皆さん、いかがでしょうか。ここからはグループに分かれて対話をしていただければと思います。15分ほどの短い時間になりますけれども、どのような気持ちで花をつくられたのか、タイトルにはどのような想いが込められているのか、お話ししていただければと思います。クリエイティブ発想や日本の美意識ということについても、何か感じたことがありましたら、ぜひお話しください。それでは、ブレイクアウトルームへどうぞ。

(グループ対話)

どのような気持ちでつくりましたか？

タイトルに込めた思いは何ですか？

(「クリエイティブ発想」や「日本の美意識」へのどのような気づきがありましたか？)

酒井：お疲れ様でした。皆さん、心なしか柔らかな表情になっているように思いますが、いかがだったでしょうか。それぞれグループでお話いただきましたけども、全体に作品を発表したいという方、どなたかいらっしゃいますか。……いらっしゃらないようですので、私共の方からちょっと指名をさせていただきたいと思います。5人のファシリテーターから、それぞれのグループでご指名ください。

酒井：では、まず私から。私が参加したグループは、皆さんそれぞれ非常に素晴らしい作品をつくられて、また非常に思いのこもったタイトルをつけられていました。皆さん共通におっしゃられていたのが、つくっている間は「無」の状態だったということ。それぞれ素晴らしい時間を過ごされたんじゃないかと思います。その中でおひとり、Mさんいらっしゃいますでしょうか。つくられた花とタイトル、感じられたことをご紹介いただけますか。

M：はい。私は、菖蒲をつくりました。タイトルは「連なる」とつけました。母が3年前に亡くなったんですけれども、一緒に日本庭園を散歩したのが最後の思い出となりまして、母を思い出しながらつくりました。一面に菖蒲が連なって、伊勢物語に出てくるような橋も連なっていて、あまり歩けない母と手をつないで一緒に歩いたことを思い出しながらつくっていました。とても良い時間を過ごさせていただきました。ありがとうございます。

酒井：ありがとうございます。「連なる」のタイトルには、いろんな意味合いが込められているとおっしゃっていましたが……

M：はい、茶道を40年以上続けておりまして、そんな文化や伝統が連なっていく、娘やいろいろな人に繋げていきたいなというような、そんなイメージもむくむくと湧いてきたということです。

酒井：ありがとうございました。では、横山さんのグループはいかがだったでしょうか。

横山：私たちのグループからは、Sさん、お願いいたします。

S：僕がつくったのは、この子たち、チューリップです。冒頭でいきなり花を描けて言われたんですけど、描ける花がチューリップとひまわりの2択しかなかったんで、チューリップを描きました。だから思い出といっても

そんなになくて。ただチューリップってすぐに開いてしまうので、きれいな花の形で見られる時期って実はすごく短い。なので、この形、きれいに咲いたチューリップが見られると、ちょっとラッキーだなんて思うところがあります。あと、一輪ではなくて、花壇にバーっていっぱい咲く感じが好きなので、3つつくりました。そこまで思い入れなくつくったので、タイトルも……。でも、チューリップっていうと「どの花見てもキレイだな」という歌詞を思い出すんですね。どのチューリップもそれぞれがキレイだっていう、その表現がすごく素敵だなんて思って。なので、そのままタイトルしたらいいかなと思った次第です。

横山：ありがとうございます。ほかにもいろいろなお話がありましたが、Sさんの、きれいな花の形が見られる瞬間がラッキーというのが、皆さんの心に残った感じでした。

酒井：ありがとうございました。では。藤田さんのグループでどなたか。

藤田：はい。私のグループは、すごく個性的なメンバーが揃っていて、楽しく拝見していたんですけど、Sさん、お願いできますか？

S：はい。黒いトレイの上でつくっていたんですけど、天井の電灯の光がちょうどトレイに丸く写り込んで、それがまるで満月みたいだなと思ったんです。最初は何の花かわからずにただ手を動かしていたんですけど、つくっているうちにどんどん梅の花に見えてきて、「満月の夜に咲く白梅」ができました。つくりながらタイトルも浮かんできて、最初に絵も描いてないんですけど、楽しくできました。

酒井：素晴らしいですね。どうもありがとうございます。それではシウンさん、どなたかお願いできますか。

シウン：伝統の中に未来があるとか、皆さんからすばらしい発言がありました。発表は、Uさん、お願いします。

Uさん：油断していました(笑)。なんか違うなと思いながらつくったのですが、朝顔です。タイトルは「しゃんとした日常」。“ちゃんと”じゃなくて、“しゃんと”です。コロナでなかなか外に行けない日々が続いていて、私は夏がすごく大好きなものですから、夏には日常が取り戻せて外に行きたいなっていう希望ですね。あと、今日の美意識っていうことでいいますと、朝顔は浴衣の絵柄にもなっていて、どんなに暑くても浴衣を着たら、しゃんと背筋を伸ばして、涼を感じられたりもします。朝顔の花は朝咲いて夕方にしぼみます。淡々とした日常なんですけれども、一つひとつが丁寧でしゃんとしているところがとても好きだったので、朝顔をつくってみました。

酒井：ありがとうございます。山崎先生のグループは、いかがだったでしょうか。

山崎：おふたりでしたが、とても素敵な作品をつくられて。ただつくったというのではなく、つくる過程で気づきがあったとおっしゃっていたのがすごく印象的でした。せっかくなので、おふたりに発表してほしいな。

酒井：まだちょっと時間の余裕がありますので、おふたりどうぞ。

山崎：では、Yさんから。

Y：はい。ひまわりが昔から好きだったので、ひまわりをつくりました。絵もひまわりを描いたのですが、まず描いて思ったのが、黄色い花のイメージが強かったんですけど、意外と種の部分がでかくて、花びらはちっちゃ

やいなと思ったんですね。立体をつくり始めたら、なんか種の根本、根幹とかつくるのにすごい時間かかって。ただ、つくりながら考えていたのが、私にとってのひまわりってというのは、「子供の頃を思い出すものなんだなあ」ということ。私があそこにいた根幹みたいなところがあって、種のズドンとしたところも、やっぱりそういう私の根幹なんだなってちょっと思ったんです。なのでタイトルも「花びら綺麗だけど、真ん中の種の存在」としました。

山崎：Tさんも、お願いしていいですか。

T：なんか得体が知れなくなってしまったんですけど、タイトルは「利他のリラ」です。リラはライラックです。小学校のときに初めて入った部活動がペーパーフラワークラブだったんですが、リラはクラブで最初に題材になった花で、そのときは写真を見ながら針金と紙でつくった思い出があります。今日をつくっているうちに、リラの花そのものに自分が入っちゃったような感覚になって。

酒井：面白いですね。

T：お花が断片というか、輪切りみたいな感じで制作が進みました。穴が開いていまして、花の内側から外側の世界を見ているという感じになって。日本の美意識の話から、八百万の神が花に宿っているなら、私たちは知らず知らずのうちに何かメッセージを受け取っているかもしれない。花びらの影から、蕾の影から、私たちに何か訴えているんじゃないかと思ったのが、自分でもびっくりしたところでした。利他というのは、そこに育つことに何も文句も言わず、そこにあるだけで自分たちを勇気づけてくれるのが花ということで。そんな存在から何を自分は受け取れるかなというふうに思いながらつくっていました。

酒井：深い気づきがあったようで素晴らしいです。ありがとうございます。

山崎：アルミホイルで花をつくることにおいて大事なものは、「自己との対話」なんですね。頭の中で妄想しているものを、いったん外に出す。外に出るのは、自分の断片なんです。そんな自分の断片と対話することが大事で、おふたりはそれを行われたんだということが話を聞いてよくわかって、素晴らしいなと思っていました。

酒井：ありがとうございます。作品はもちろん、我々の気づきになるようなお話をいただき、ありがとうございました。

■クロージング~フィジカルな要素と「自己との対話」

酒井：では、最後に山崎先生、全体で感じられたことなどあったらお話いただけますか。

山崎：皆さんの作品を見てですね、もう想像以上に良くつくられていて、ちょっとびっくりしました。僕らは若干心配しながら企画していたんですけど、皆さん、手を動かしているうちにできてきたというところもあったんだろうと思います。手が動くっていうのは、実はアルミホイルの良さでもあるんですね。

コロナの関係で、オンラインになるワークショップが多くなりました。ただオンラインだと、どうしてもフィジカルなものがなくなっちゃうんですね。人間というのはフィジカルな方が感じるんです。先ほど横山さんが言

ってくれたみたいに、日本の美意識の中では五感がすごく大事で、五感ってやっぱりフィジカルですよ。嗅覚、触覚、味覚……全部フィジカルなんです。オンラインだと、どうしても五感が遮断されてしまう。そういう制約の中でワークショップを組み立てるときには、特にフィジカルを意識することが、すごく大事だということです。

そういう意味でも、このアルミホイルはフィジカルな要素を使うことができる素材。音もするし、ザラザラとした触覚もあるし、ちょっと臭いもするかもみたいな、そういうフィジカルな体験が、やっぱり訴えてくるわけですよ。ワークショップというついで、皆で何かをやると思ってしまう。だけど「自己との対話」で訴えてくることも大事。五感で自分を攻めてくる感じといったらいいでしょうか。自分の外に出た、アルミホイルという実体物が、五感で自己と対話してくれるわけです。

皆さんの発表を聞いていて、思い出を語ってくれたり、気づきや発見を語ってくれたりしたというのは、まさに「自己との対話」の成果です。美大だから造形というわけじゃなくて、「自己との対応」が重要だし、五感という要素もすごく重要だし、それをオンラインでうまくやれるといいよねっていうところを、皆さんちょっと感じてくれたならいいなと思っています。

今回は「日本の美意識」としましたが、これはひとつの視点ですよ。なんの切り口もなしに「さあ、やってください」というよりは、ひとつの刺激として提供する。刺激の仕方にはいろいろあると思います。僕は日本の美意識をテーマにやりましたが、ワインとチーズのイタリア文化でもいいし、音楽もいいですね。音楽も刺激だから、そこから何かを思い出したり発想したり、新しいことを考えたりする。ポストイットを模造紙に並べて「はい、どうしましょう！」というのでは、発想が限られちゃうんじゃないかなということです。皆さん、どうもありがとうございました。

酒井：どうもありがとうございました。あっという間に2時間が経とうとしています。クリエイティブ発想あるいは日本の美意識ということで、何か感じられたことや気づきがあれば幸いです。どうもありがとうございました。